

- とアイヌ』平成十四年度普及啓発セミナー報告 二〇〇三
- (15) 新聞研究所(編)『日本新聞年鑑 大正十四年版』一九二五
新聞研究所 第四編 七〇頁
- (16) 二〇一七年四月六日、『Twitter』にて知里幸恵『アイヌ神話集』内の六話と同じ内容、同じ順番で掲載されていると指摘されていると指摘されている。
- (17) 「著作権 Q & A」公益社団法人著作権情報センター <https://www.cric.or.jp/qa/hajime/hajime.html> 「民話」伝説など地域に伝承される話の大筋はそのまま、枝葉において多少の修正増減を加えただけのような場合は、そこに新たな創作性は認められず、新たな著作物ではありません(二〇二〇年十一月四日最終確認)
- (18) 札幌放送局『北海道郷土史研究』一九三二 日本放送協会北海道支部「小樽の昔」三六〇～三六二頁
- (19) 北海道庁『北海道立文書館所蔵資料案内』私文書』橋本莞尚関係文書」<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sn/mnj/d/guide/b/hasimotogyousyuhm> (二〇二〇年八月二十一日最終確認)
- (20) 洛西橋本亮尚 天民阪牛祐直「小樽の人と名勝」一九三二 小樽出版協会 二二六～二二八頁
- (21) 藤島隆「小樽図書館の設立過程と活動について」『北海学園大学学園論集』一二九 二〇〇六
- (22) 日本放送協会『ラヂオ年鑑 昭和七年』一九三二 日本放送出版協会

【第七七回研究例会 野村純一論―その研究手法と業績―】

研究例会報告

山田 栄克

二〇一九年十月二十日、第七七回研究例会としてシンポジウム「野村純一論―その研究手法と業績―」を國學院大學院友会館で開催した。

野村純一(一九三五年～二〇〇七年)は本学会創立から尽力し、多くの研究成果はもちろん、その方法についてもまだまだ発見が多くある。司会を務めた私もその研究のすべてを理解できているとは言えないが、その足跡と成果からの可能性は未だ広がりを見せているように思われる。特に昨今、昔話は社会の大きな変化に伴って担い手が「伝統的な語り手」から「新しい語り手」となったと言っても過言ではないほど、その伝承母体及び、その性質を変化させている。それは昔話だけではなく、伝説ですらもそうであるということをフィールドワークをしていくと痛感する場面が多くなった。そういった伝承が大きく変化していく過渡期に昔話の調査及び研究の第一線で功績を残した野村の成果や方法を整理することが学界に寄与するであろうという思いで、この例会を計画した。

- (23) 小樽高野山日光院『日光院案内』<http://rigoop.jp/nikkouin/menu> (二〇二〇年八月二十一日最終確認)
- (24) 注(17)三五六頁
- (25) 弘前市立図書館『津軽一統志』一七七六
- (26) 河野本道(選)『第二期アイヌ史資料集』六一九八―北海道出版企画センター
- (27) 北海道大学北方資料データベース『明治元年明治二年小樽高島明細書』五二頁
- (28) 遠藤匡俊「一八〇〇年代初期のアイヌの社会構造と命名規則の空間的適用範囲」『地理学評論』七七(一)二〇〇四
- (29) 朝日新聞社編『海の伝説と情話』一九三三 朝日新聞社
- (30) 阿部敏夫『北海道民間話(生成)の研究』伝承・採訪・記録』二〇一二 共同文化社
- (31) 丹菊逸治(@rangiku) 二〇一九年四月二十九日『Twitter』(ひつじ・ようこ/アイヌ文化研究者)

パネリストには、野村と同じ時代に國學院大學を研究拠点としており、『野村純一著作集』(全九巻)の編集責任も務めた小川直之氏から民俗学、化学の視点から、野村の著書『新・桃太郎の誕生』(二〇〇〇 吉川弘文館)刊行と同時期に桃太郎を伝説として研究していた齊藤純氏、野村の教えを直接受けた常光徹氏から発言をいただいた。詳しくはこのあとに続く論考の中で述べられているので、ここでは当日に私がとったメモからその内容を振り返りたい。

小川氏は「口承文芸の文化学―野村純一の視座―」と題し、野村の業績について、国際研究の土台作り、口承文芸、特に昔話を芸能などに関連付け、そして昔話には作法(規律)があることが人文学の学問対象であるということを抱保していることを明確にしたと指摘した。そして語りの時空論を明らかにし、現場を理論にしていた過程に述べた。

齊藤氏は、「遠望する野村純一―物語と「もうひとつ」の発想―」と題し、研究を志したころの書籍からの、そして桃太郎論からの野村についての発表であった。野村の名前は『民俗調査ハンドブック』(一九七四 吉川弘文館)や『民俗研究ハンドブック』(一九七八 吉川弘文館)などの研究者の入門書で若手の導き手だけではなく、『別冊歴史読本』(一九八三 新人物往来社)のような大衆的な読み物にも見られることから、大衆的・庶民的な姿勢も持ち合わせているとした。そして研究者が多くの事例に当てはまるように抽象的な表現を行うのに対し、

具体例を挙げて論を展開していき、その間にある事象を見出し、いく、いわば「中間」をみる視点を持っていたということを書いた。そのうえで、野村の類語、対比表現の使用といった分かりづらい文体が柳田を想起させつつ、かといってそれだけではなく講演録では、話題をつないでいき、オチをつける語り口が見られ、いわば「語りによる論文」と言える位置付けた。

また、野村の視点に話を展開させて、口承文芸研究ではあまり取り上げられなかった時代から高木敏雄や上田敏を取り上げていたことから、作家論や語り手論のように研究者論も必要だとの思いを持っていたのではないかと指摘した。そして桃太郎研究では、語り手の経験や系譜から伝播を考えるように、郷土史家の見聞や何を素材にしているかを見つつ、桃太郎像の伝播を論じているという独自性を見出した。また、その研究をまとめた『新・桃太郎の誕生』の中の「もうひとり桃太郎」という章題からも分かるように、何かを見つけていてさらにもう一つというような視点、つまり現実は多彩で連続しているの、そこから抜け落ちないように、結論を急がないことが見て取れると述べた。その視点で見えていくと、野村の研究は、それぞれについて触れながら、結論を急がず、観察を続けようとする姿勢、中間項、第三項目への視線から、その広がりを感じさせるものであるといえるとした。

常光氏は「野村純一と口承文芸研究」と題して、問題を身近なところから発見していくその手法や言葉の感性から話を進め

【第七回研究例会 野村純一論—その研究手法と業績—】

野村純一と世間話研究

—『日本の世間話』から—

常光 徹

はじめに

「君の発表は象に虱が喰いついたようなものだ」というのが、野村純一先生から声をかけてもらった最初の言葉である。大学一年の夏で、今も鮮明に覚えている。私は、先生が顧問をされていた研究会に所属していたが、その例会で「土佐の河童（猿猴）」について発表した。教室で聞いていた先生が、発表後に冒頭で述べた感想である。私は、一瞬、象に虱の譬えが理解できず、象という言葉から、ひよっとしてすごい発表をしたのか、と思ったが、そうではないことはすぐ分かった。先生のアドバイスは、河童に関する基本的な文献をきちんと読みなさい、という内容だった。以来、公私にわたって、何かと指導をいただきお世話になった。

私には三人の恩師がいるが、その出会いを振り返ると、人の縁と繋がりはつくづく不思議なものだと思う。高校時代からお世話になっている民俗学者の坂本正夫先生が、土佐の昔話や笑話を調査・研究されていたことが、今思い返すと、野村先生の

ていった。そして世間話について、類型化を試み、そこに話としての生成と変容、そして文芸性を見ていたことを示唆した。

ここで紹介したパネリスト三氏に共通していたのは、結論を急がずにその過程を示していたということである。それが野村の研究の特徴ともいえるだろう。

野村の難解な表現や文章は、その後の討論でも取り上げられしたが、それこそが野村の目指したすぐに答えを指さない、中間を見る姿勢を養うことになるのだろう。

小川氏が『野村純一著作集』第一巻の解題に記している、「伝承や語りの民俗を、まだ何とか実地に知り、時間できた時代に野村はフィールドに生きた（中略）野村純一は、今後の昔話伝承研究にとって共通に乗り越える目標となる指標論文を残してくれたといえよう」（二〇一〇年 清文堂出版）。まさしく野村の投げかけた問題は、昔話研究の方法が大きく変わった現在だからこそ、これからの研究の指標となるのである。

（やまだ・ひでかつ／例会委員）

もとで口承文芸を学ぶ機会に繋がっていた。その後、野村先生の紹介で、鈴木棠三先生に指導をいただく機会を得たのである。

野村先生には、研究の場を離れたところでも、いろいろなことを教わったが別の機会に譲りたい。本学会主催のシンポジウム「野村純一論—その研究手法と業績」（二〇一九年十月二十日）では、小川直之氏が主に野村純一の昔話研究について、齊藤純氏が伝説研究について発表された。本稿では、『日本の世間話』（一九九五東京書籍）に収められている論考を手掛かりに、先生の世間話研究について若干述べてみたい。

一、野村純一の世間話観

『日本の世間話』は次の論考から構成されている。はじめに—世間話の世界。第一章 口裂け女—話の行方（『口裂け女』その他）。『口裂け女』の生成と展開。『もうひとりの「ザシキワラシ」』。第二章 六部殺し—話のカリキュラム（『都市伝説と民話』『こんな晩』への足取り）。『危険な話群—『断腸亭日乗』から』。『人參と欲張り婆さん』。第三章 話の主人公たち—話の実践（『嘘言の庄助』のことなど）。『江差の繁次郎』。第四章 猫、そして狐—話の化身たち（『隠岐の化猫譚』。『眷族列伝の意図』）。あとがき。

世間話を定義するのは容易ではない。従来の民俗学が目指した世間話は「日常の常識や経験の外に属するような内容（主に衝撃的なできごとや奇事異聞など）で、類型性（モチーフや話型の共通性。一定の分布と連続性）が認められ、しかもその言述が生活